

[特集：国際フィールドワーク]

大学教育としてのフィールドワークの方法と実践

A Method and Practice of Fieldworks as University Education

片 茂 永

PYEON Moo Yeong

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: mooyeong@vega.aichi-u.ac.jp

1. はじめに

この記録は、愛知大学における授業科目としての国際フィールドワークに限った内容であることをまずお断りさせていただきたい。つまり、フィールドワークを専門とする研究者や大学院生のための方法論や実践の話では決してない。学部の授業科目という範疇は、最初から最後まで私たちの思考や行動を拘束し、なおかつ限定された土俵であるからこそ味わえるものであり、様々な喜怒哀楽も実はそこと連動しているからである。

例えば、研究者にとってのフィールドワークに付きまとう時間が、とてもゆっくりしていて、いつまでもじわじわと近寄って来る影のようなものであるなら、授業としてのフィールドワークは、何もかも圧縮ファイルのようで、それがいきなり解けたり、または突然飛び跳ねたりするため、なかなか先を読むことが難しい。そして、研究者のフィールドワークが終演を知らないまま延々とつづく連続ドラマのようなものであるなら、学部授業としてのフィールドワークは、あっという間に終わってしまう一回かぎりの実験映画のようなものであるといえよう。

この一回限りの実験映画は、実は、理屈的には、上映も一回限りであって、続きが期約されるような義務感も何もない。あっさりとした終わり方とともに、そして何もなかった

かのように、新しいポスターに貼り替える作業が繰り返して行なわれてきた。調査者としての学生たち一人ひとり、フィールドワークが終わるや否や就活に余念がなく、現地で体験したはずの貴重な問題意識も充分熟成されないまま、大学をあとにする。そして、現地情報の後輩への引き渡しもあり行なわれぬまま、翌年には新米のフィールドワーク希望者が待っている、という有り様だった。その原因は、根本的にはこの科目が必修ではなく選択であるという事実と無関係ではないが、理由はともあれ、全体からみれば正直短絡的な部分が少なくなかった。

このように、大学授業としての私たちのフィールドワークの中には、様々な記憶が所狭し詰め込まれていて、それも一つ一つのフィールドワークが相互連続性の薄い個別ノートのようなものであったから、話を要領よく紡ぎ出すことが難しい。一言でいえば、毎回が実験的だったからである。

従って本稿は、人類学や民俗学の調査方法論からは程遠いものではあるが、愛知大学の国際コミュニケーション学部生たちとともに歩んできた足跡を辿りつつ、その一つ一つに求められていた方法や実践についてのあるがままのことを少しだけご紹介することを目的とする。そして記録の範囲には、国際フィールドワークという授業科目として実施されていた韓国フィールドワーク8回、演習ゼミにおいて行なわれた日本フィールドワーク5回、合計13回のフィールドワーク実施を踏まえた諸事項が含まれよう。

2. 韓国フィールドワーク

2-1. 前期（第1回～第4回、2000年～2004年）

そもそもフィールドワークという言葉には、現地調査の専門性からすれば、やや一般性の感覚が付着しているかのような語感、または根拠のない安堵感さえ漂う場合がある。ところが、響きにおける微妙な変化があったとはいえ、フィールドワークの基本から免れてもよいような局面ではなかった。それで当初のフィールドワーク委員会が、その方向性に関する様々な意見交換を行い、大学の授業科目としてのフィールドワークが持つ意義を熟考してから下した結論は、やはり現地調査としてのフィールドワークを貫くことだった。

大学側の諸事情や通年科目としてのフィールドワーク授業の都合等から考えれば、結論はそれしかなかった。その結果、調査報告書は当然な公開手段としてみなされ、旅行記のように見聞の記憶を綴る文集類では満足いかなかったし、また許されるものでもないと考えられた。

このような姿勢は、15年前のフィールドワーク委員会にとって重要な一歩であると同時に、プレッシャーでありつづけた。そして私はといえば、時代遅れな民俗の調査方法を念頭に私自身や学生たちの精神をさらに縛りつけた。過去からの学術的遺産に対する精神

的拘束は、神なき民俗や、虚構的民俗現象についてのいわゆる民俗学の錯視現象に気づくまで続いた。前期の中でも特に第1回～第2回目の韓国フィールドワークに参加していた学生たちにとってみれば、思ってもみなかった民俗調査に動員された結果となってしまったのである。職業としての学問によって作り出された概念と現実とのギャップは広がるばかりだった。

さらに大変だったのは、以前の民俗調査方法論でよく耳にした、“民俗誌作成の7割程度はだいたい宿で終わる”といった言い伝えを頑なに守ろうとしたことであった。その結果、1/100,000地図をはじめ、1/5000地図、住宅地図、調査者作成の地図、そして調査カードは何よりも大事だった。これらは学生諸君に特に強調した調査道具であると同時に、民俗誌作成のためという理由からとても重要視していた。そして、その他にも特に調査カードが常に重宝とされるなか、その記述作業を行うのが1日の野外調査活動がほぼ終わり、宿にもどってからの時間帯だったため、その疲労感や重圧感の加重は十分予想可能なものだった。

しかし、民俗誌作成に大きく貢献すると信じてやまなかった調査カードに対する信念にも徐々に陰りが見え始め、また半信半疑へと発展、ひいては調査カードの無いフィールドワークに移ったのは第5回目からだった。全8回の韓国フィールドワークにおいて、前半の4回が民俗調査方法論に充実に立脚したまま、民俗世界や民俗文化が調査対象としての基準であったなら、後半の第5回目から第8回目までの準拠は、生活世界や生活文化だった。そして、発想の転換には調査カードをどうするかも深く関わっていた。調査カードの記入要領は、民俗調査や民俗事象に拘束されていたからである。それで、指導する側だけでなく、指導を受ける側に対しても調査カードのプレッシャーは並々ならぬものだった。

地図の活用法や調査カードの作成は、人類学や民俗学を専門としない学生たちにとってはやはりしんどい作業だったと思う。調査カードを活用するためには、まず類型分類が適切に行なわれたかどうかが先決問題であって、分類されない調査カードはとりあえず調査内容としては優先順位から後回しにされる作業も伴った。従って、お互い筋道の通る調査カードを1日3枚作成することが段々と厳しくしてくるのも不思議ではなかった。調査カードの共同記述組でもある調査組は、どんな時でも調査カードを念頭において歩いた。1日3枚のノルマは思ったほど簡単ではなかったのである。

ところで、調査組のことだが、調査隊全員による集団調査ではなく、いくつかの組に分けての組別調査が中心だった。つまり、フィールドワークに参加する学生は総数で普通10～15名だったので、一組2～4名を一単位にすれば、5～6組のどこかには必ず自分が編成されることになる。場合によっては、例えば1～2組と3～5組を各々A班とB班に分けることもあった。調査隊全体の主題や組別の調査テーマ、または調査環境等に柔軟に対応するための工夫の結果だった。

このような組織の下で行なわれた組別フィールドワークだったので、当然ながら1日の野外活動のためには自己管理に徹底を期しなければならなかった。言い換えれば、自己管理に伴う自己責任が問われる時間が多かったことを意味する。肉体的にも精神的にも、前期の調査隊はいつも疲労感との闘いのようにさえみえたのも、調査カードに加え、自己管理が大きな原因だったと思われる。

ところが、学生たちにとってさらに大変だったと思われたのは、調査カード作成後のミーティングだった。

調査カードは、毎日のミーティングのための貴重なレジュメの役を果たし、そのため調査カードは毎日コピーを取らなければならなかった。要するに、このミーティングは90～120分間続いたので、毎日の夕方はゼミ三昧だったといえよう。でも、前期のこのような強行軍は、“民俗誌作成の7割程度はだいたい宿で終わる”といったフィールドワーカーなりの信念に立脚してのことだった。

それで学生たちは、1日の調査カードが例え3枚以上達成したとしても、調査者が描く物語とは無縁の調査カードがあれば、それを除いてさらに補強すべく新たな調査カードの作成に夜遅くまで貴重な休憩時間を割愛しなければならなかった。前期の韓国フィールドワークに参加した学生たちが、僅かな時間に洗濯をするためなかなか眠れなかったのは、調査カード、そしてゼミ形式のミーティングのせいだった。

ところが、寝床に着く前にもう一つやらなければならない仕事があった。それは日誌作成だった。調査カードが調査内容としての客観的な‘事実’の記録であるなら、日誌ではその日の調査中に感じたりした諸々の‘意見’や‘感想’の記述が許された。この区別の有耶無耶は、たちまち民俗誌のあり方を根本から疑わせ、ひいては文集へと傾けてしまう要因にもなったので、調査報告書に拘っていた私としては、調査カードとともに調査日誌のほうも強調せざるをえなかったのである。

しかし、前期を通して、調査カードと調査日誌との使い分けや融合に満足することはあまりなかった。指導にあたる者としての力不足をひしひしと感ぜざるをえなかったのは、まさにこのくだりからだった。調査カードと調査日誌の正しい理解や適切な活用は、フィールドワーカーにとっては、民俗誌やそれ以上の研究へと発展するための極めて重要な基本であり礎だったにも関わらず、その克服は正直順調ではなかった。肝心なところでつまづいたままだったように思われた。要するに、この辺から現れ始めた期待外れや試行錯誤の連鎖は、次なる段階へと前進することを拒み続けた。

さて、調査カードと調査日誌との書き分けや活用法に対して学生たちが苦労したのは、調査カードを作成するための悪戦苦闘のあげくに力尽きてしまったからではないかと思ったことがある。事実と意見との混同は日誌等の文章からも消えないままだった。つまり、調査カードは事実関係の記録が中心であって、事実関係は伝承者による証言が大半を占め

た。そして伝承者からの語りを採録するためには、録音機を持参した上での聞き書きをしなければならなかった。それに、聞き書き内容の訂正や補足のためには、録音の文字起こしは避けられなかったし、この作業をするためには、インタビューに費やされた時間に比例するほどの時間がさらに必要とされた。

このように、調査ノートへのメモやインタビュー録音の文字起こし、それに調査カードへの書き移しへと続いた過度な整理作業は、その後の日誌や民俗誌記述のための余力を奪ってしまったのではないかと思ったのである。それで、報告書の上で充分生かされないまま、現在に至るまで眠りつづけている調査カードを見てみると、今も残念に思う。

異国へと出かける前に、あのような一連の調査体験を日本のフィールドにて一度もしたことがないという異常な事実からすれば、本当は無事に帰ってきただけでもめでたいことだったかもしれない。でも、現実はどうしても調査報告書だけがすべてを語ってくれるかのような雰囲気だった。それで、前期の報告書は、右往左往のなかあれこれと模索を繰り返した過渡期的な状況であったことを如実に示してくれた。

そんな中、民俗や伝統世界に対する学生たちの微妙な変化を感知したのは大きかった。民俗学者の強い信念の産物だった民俗が、学生たちにとっては、生活世界の中にさりげなく溶け込んでいるものだと思えたからである。伝統と現代、または民俗と反民俗という観念上の境界線についても学生たちはある意味自由奔放だと思われた。それで、生活世界に対する私の観念的な理解が、学生たちによってはじめて、あるがままの事態として映し出されたことに感謝している。

第1回～第2回の韓国フィールドワークでは、民俗学的調査方法論に対する私の信念と現実の生活世界、そして学生たちからなる三者が互いに接点を掴めないままばらばらに動いていた。それに、第3回～第4回の間は、民俗や民俗世界に対する懷疑が深まる中、学生たちと私の間のギャップは依然として縮まらなかった。そして、新しい方向性に対しても確信を持てるほどの段階には至らなかったため、第3回～第4回は、方向転換のための模索で焦りだけが募るフィールドワークだった。

つまり、前期の第1回～第4回を総括するならば、民俗や民俗学的方法論、そして現実世界との不安定な関係、さらに新しい地平の見えないままの中途半端そのものだったと思われる。

2-2. 後期（第5回～第8回、2008年～2012年）

韓国フィールドワークの後期を迎えるまでの3年間の休息は、民俗学に対する再点検とともに、文化関連の大学教育へ向けての有意義な準備期間だった。発想転換の背景には、以前からしばしば紹介されていたドイツ民俗学の新しい傾向が大きく関与した。主に河野眞によって翻訳されたフォークロリズム(Folklorism)が一つのきっかけとなったのはいう

までもなく、中でもフォークロリズムの産婆役だった現象学やその構造は私の民俗学研究や教育を根本から揺るがした。

このような経緯があって、前期の民俗や民俗学、または民俗調査という言葉の後期からはほとんど使わなくなった。使用が許された場面はあったものの、それは生活世界や生活文化に収斂される限りでの用語だった。それに、伝承や伝承者という民俗学にとって極めて重要なキーワードも自然に抑えられるようになったが、それは文化研究や文化調査、または社会や人々等に置き換えられるような形で進められた。なお、昔や伝統という用語さえも部分概念として位置づけられた上、フィールドワークという授業科目が目指すべき方向は、あくまでも生活世界における生活文化だった。

つまり、民俗や民俗調査方法は、生活世界や生活文化を調査する範疇内の、そしてそれが問われるある部分的空間や時間に限っての概念や方法とされた。民俗や民俗調査方法のフィールドワーク授業に占める前期の存在感が全体的だったとすれば、生活世界や生活文化という新地平でのそれは部分概念に一步下げられたことを意味する。

ところで、生活世界における生活文化を調査対象にするとしても、過去と現在の相対化が民俗学ほど深刻な問題ではなかったので、逆に言えば、調査者としての行動や精神的な模索範囲は一気に増幅された結果となった。

要するに、調査範囲の増幅がいったい何を意味するのかといえば、既存の民俗や民俗学によって提示可能だった範疇を包含しながら、もっと広い概念としての文化やその調査方法を示唆することだったのである。

これはさらに実験的だったので、大変なことになってしまったなと思ったことを覚えている。この段階で気づかされたのは、生活文化や生活世界という概念をいきなり前面に立てるよりは、取りあえずは伝統と現代という両概念を相変わらず取り上げることにより、以前の概念や調査方法の残影を踏襲しつつも、調査対象としての文化概念を幅広く捉え直したいという意図での新地平を常に開けておくことだった。後期の韓国フィールドワーク報告書に‘伝統と現代’というサブタイトルをつけたのはそのような背景からだった。でも、あくまでも生活世界や生活文化こそ後期の本音だったことはだんだんと明らかになってきた。

それに従い、教員による民俗世界への誘導は徐々に弱まり、学生たちによる自主的かつ自由な生活世界への歩き方が増えはじめた。民俗調査方法論の基本は生かしながらも、新地平への挑戦のためなら、学生たちによって考案された方法も尊重するようになった。例えば匙のような、いま使われている生活道具に施された細かな文様類の調査はその一つで、学生たちの実践を間近で観察するため、私は一度も訪ねたことのない匙専門店や展示館を訪問しなければならなかった。

学生たちは、いわゆる昔と現代を自由なスタイルで行き来していたし、その結果、以前

の調査範囲はさりげなく無視されるのを目撃せざるをえなかった。毎日のミーティングは前期と変わらなかったが、私が学生たちに話しかけたり説明したりする時間より、学生たちの話しに耳を傾ける時間のほうが増えはじめた。もはや民俗調査方法のみが有効とはいえない状況だったので、学生たちが持ち帰ってくる話題を私は充分楽しむようになってきた。前期の民俗や民俗調査方法によって持ち帰られた話題がとても陳腐で、なおかつ結論までの道筋が透き通って見えていたのとは違い、後期の話題には斬新なものが少しずつ増え始めたのである。

例えば、前期の主なテーマでもあった江陵端午祭を後期でも調査対象にしてみたが(2008年6月の第5回韓国フィールドワーク)、後期の学生たちはお祭りの会場にて販売される観光商品や駄菓子類等、以前ならほとんど注目されることのなかった物に対しても関心を示してくれた。このような変化を目の当たりにした私は、はじめは戸惑っていたものの、新しい調査内容から開かれる次なる扉をだんだんと待つようになった。

祭りとは、本来なら人間と神との霊的交感によって成り立つ神事として理解されていたから、固有なる内部志向世界こそ重要な問題とされるべきだった。そして、教育の現場では、そこへ導くことこそ、民俗学にとっては当然な時代的要請でもあった。ところが、それとは正反対の外部志向世界に視線が向くようになったのである。

祭りにおける外部志向性には、現代社会が抱える諸問題が投影されがちなので、いわゆる現代民俗学としては避けられない問題が多い。町おこしはいうまでもなく、人々に見せるため、またはもっとたくさんの観光客に来てもらい、なおかつ高く評価されて有名になるために企画される諸々の外部志向性こそ、学生たちの関心事となっていた。観光商品はそのような意識変化の一つにすぎなかったし、以前の民俗学なら調査対象に含まれることはまずないはずの問題が多かった。

調査対象の多様化は、観光や駄菓子類に止まらず、化粧品や内なる美意識、または現代の大衆音楽等にまで及んだ。調査方法においても、聞き書きという古典的な方法の他に、唐突にも「100名に聞く」をソウルの街頭で数回挑戦したり、様々な体験を買って出ることも拒まない勢いだった。

そんな中、ここで決して言い忘れてはいけないことは、フィールドワークにおける二つの新しい試みがあったことである。

一つ目は調査道具のことで、以前のフィールドワークでは現場に向う時、調査ノートに録音機、そしてカメラ、地図、巻尺等たくさんの調査道具を必ず持参しなければならなかった。そして、それらをうまく使って収穫された調査結果を宿に持ち帰ってからは、調査ノートや調査カード整理、そしてテープ起こしや他の調査員との情報交換を兼ねたミーティング、それにつづく日誌作成等は欠かすことのできない重要な日課だった。

しかし、このような一連のプロセスを担っていた多々の調査道具が、一台のスマート

フォンに取って代われようとは、それまでの私は夢にも思っていなかった。大変化が起こったのは、2011年9月の第7回の時だった。

この時から学生たちは、調査ノートや録音機、そしてカメラや写真へのキャプションのメモ、地図など、フィールドワーカーに必要な多くの機能をスマートフォンで使いこなしていたのである。私の方から事前に紹介した覚えはなく、フィールドワークの現場で偶然目撃しただけであった。このような調査振りに最初は正直困惑したが、学生たちにいろいろ説明してもらってからは、私も徐々に納得するようになった。

調査もさることながら、フィールドワーク授業にとって一番の大問題、即ち、安全確保のためにはとても信頼できる道具であることが分かったのである。それぞれ異なる地域にて組別調査を行なう韓国フィールドワークにとってみれば、組同士や全員との連絡手段確保は極めて重要な問題であった。さらに、フィールドワークの実施に伴う学生一人ひとりの精神的な安定感を保つことも現地に着いてからは懸案問題でありつづけた。それを一定部分解決してくれたのがカカオトークやラインのような SNS (Social Network Service) であって、この事実からしてもスマートフォンは予想以上の力を発揮してくれた。ソウル市内に全員が散開したまま、一斉にリアルタイムでコミュニケーションがとれたのは、とても楽しく、そして安堵感を持たせてくれた頼もしい友だったのである。

2011年第7回韓国フィールドワークでは、5か組のなか4か組が、スマートフォンを重要な調査道具として利用していたが、2012年の第8回では、5か組全員がスマートフォンを多方面に活用していた。そして、第7回の際にスマートフォンの活躍に偶然遭遇した私も、第8回では、積極的にそれを説明するようになった。調査の効率に目覚めたからだけでなく、学生一人ひとりがとても積極的かつ自主的になった背景には、SNSを始めとする諸機能があったことに気付いたからであった。フィールドワークの基本を維持しながらも、野外授業の際によく問われる学生たちの安全問題にもしっかりと対応してくれたので、スマートフォンの工夫次第では、その可能性はさらに拡大されるかもしれない。

二つ目は、いったい何を調査するのかという最初の着想段階において試みられた。即ち、民俗世界を生活世界の内包と考えるようになった後期からすでに感知はしていたもので、それが段々と確信へと固まったという局面かもしれない。つまり、民俗世界における問題の着想には、全般にわたって教員からの詳細な説明や指導、または誘導は当然なように行なわれた。その影響もあって、学生からすれば、受身的な調査だったといわれても仕方がない。しかし、矮小化されつつある民俗を横目に、生活文化へと地平を広げた途端、その範疇に関する教員側の説明はもはやあまり意味がないのではないかといった自覚に至ったのである。

それで下した結論は、今なぜ調査をするのかという根本的な問いをはじめ、フィールドワークの全プロセスを強く拘束していくはずのいわゆる‘問題の発見’を学生自らが自主

的に考察しなければならないということだった。要するに、フィールドワークにおいては調査方法以上に大きな問題である調査テーマのことを学生の判断に任せることにした。これは、スマートフォン以上の革新であって、不安が払拭されないままの挑戦だった。第7回～第8回のフィールドワークがそうであって、2011年と2012年2回にわたって試みられたのである。

しかし、この試みは結果的に予想以上の成果をもたらしてくれた。授業科目としてという限界はあったものの、よくいわれる異文化体験や異文化理解、そしてレポート作成にいたるまでの一連の過程を何よりも楽しい授業にしてくれたのである。参加学生全員の積極性がまず欠かせなかったことはいうまでもない。そして、この積極性が一気に噴出した一つの貴重なきっかけが他ならぬ自主的調査だったのである。

後期の後半、つまり第7回と8回の韓国フィールドワークを通して試された以上の2点は、これからの国際フィールドワークに対しても何らかのヒントになればと期待している。

3. 日本フィールドワーク

日本フィールドワークの必要性については、以前もたびたび指摘されていた。海外での国際フィールドワークを行なう前に、日本国内でのフィールドワークを通して練習しなければならない諸技術や要領がいろいろあったからである。そのような練習を、まずは国内で実施することによって自ずと身につくものも多く、教室の事前研修だけではどうしても限界がある。自然系の学生たちが、例えば森林の中に入ってからやらなければならない実習があったり、医学系の学生たちがテキストだけでなく、人体を目の前にしつつ実践しなければならない練習があったりすると基本的には変わらない。そのような実践や現場感覚の中で伝授すべき肝心な何かは欠けたままいきなり海外フィールドワークに挑戦する現状は、いずれ改善されなければならない。

いずれにしても、現行の教育課程や授業科目の範囲内では日本フィールドワークという別途の科目設定が難しく、止むを得ず、演習ゼミを通して少しでも現場感覚を養わなければならないと判断した次第である。それが2001年から2005年までの5回にわたる日本フィールドワークだった。国際フィールドワークとしての韓国フィールドワークの前期にすっぽり入る期間だったので、わたし自身、生活世界や生活文化を文化関連授業に積極的に結びつけようとはしなかった時期であった。

2001年度の第1回日本フィールドワークは、愛知県一色町佐久島で行なわれた。さて、なぜ島だったのかということだが、日本民俗学では島や僻地を初期段階から好んで想定してきた理想的な調査地域であって、まとまった環境での民俗調査ができるというメリット

が選定の一番大きな理由だった。さらに、三河湾に浮かぶ島々は愛知大学とともに愛知県下に位置していることから、地元を見つめなおす上でもちょうど良い地域だと判断したわけである。

韓国フィールドワークと同じく、組別調査だったこと、そして典型的な民俗調査方法に基づいたフィールドワークだったことをまずいわなければならない。民俗やその調査の有効性についてわたし自身まだまだ信頼をもっていた時期だった。愛知県の地元ということもあって、全員で島に入ったり、または組別の自由な日程調整による調査計画を立てたりした。しかし全般的には、民俗調査方法に限ってみれば、韓国フィールドワークの前期とほとんど変わらなかった。従って、録音機や調査ノート、カメラ、そして調査カードと日誌の作成など調査道具及び一連の調査プロセスは必ず守られた。

地図についても、調査テーマによって主題別の地図を入手したり作らせたりした。例えば、佐久島の宗教地図や休耕中の田んぼの地図を作らせた。前者には島の寺や神社、並びにその他の民間信仰関連の場所が記され、佐久島における宗教世界を明らかにしようと試みた。後者においても、佐久島は漁労文化が中心だろうという先入観とは裏腹に、かなりの水田や畑もみられ、半農半漁としての島世界をあるがままに描こうとしたつもりである。その他、足りない文献資料については、地元の方々にお世話になったおかげで、何とか拝見することができた。言葉の壁がないお陰か聞き書きもスムーズに進んでいるかのように見えたし、滞在環境においても問題になるほどのことはほとんどなかった。地元での調査が持つメリットを思い存分味わえた佐久島フィールドワークだったといえよう。

しかし、学生たちと一緒に行なったいわゆる民俗調査というのは、これが多分最後だったのではないかと覚えている。それは、学生たちに何かの問題があったというよりは、やはり民俗の急激な変化による私たちの戸惑いが大きな原因だった。つまり、調査対象や方法に対する抜本的な見直しが問われる中、その対応に追われてはいたものの、正直納得できるような新しい発想にまでは至らなかったからだ。中でも一番困ったことは、必ずしも島世界が持つ独特な保守性のせいだけではないと思うが、島の人々の外からの学生たちへの視線はいつもあたたかいものではなかった。調査者と被調査者との最初の対面、つまり玄関を開けてくれることさえ躊躇う家が少なくなく、これにはさすがの地元の学生たちにとっても妙案がなかなか思い浮かばない様子だった。

島の人々からすれば、あらかじめ連絡がなかったとか、面談要請がなかったとか、いわゆる予約制のような現代文化に慣れていたのである。このような状況は、本当は佐久島だけでなく、日本のほとんどの地域で予想可能な社会変化だった。予約による人為的な話し合いではなく、自然体のあるがままの話し合いがどれほど困難な作業であるかを、佐久島のフィールドワークを通して十分に気づかされたのである。

あれこれと試行錯誤のなか一つ残念だったことは、2001年第1回日本フィールドワー

クの貴重な体験を、ただ単位レポートとして提出してもらっただけで、一つの報告書としてまとまった形で残さなかったことである。時代的産物としての佐久島の民俗文化について、証拠の一部さえも残さなかったことを考えると今も悔いが残る。

当時の学生たちは、言葉の自由な自文化社会でのフィールドワークのおかげだったのか、島での調査振りはとにかくとても軽快だった。通訳も要らないし、異文化への学習も別に必要としなかったので、島の風土を素直に楽しんでいて、島に入って間もない内に散開しての調査が可能だったし、なおかつ調査方法についての教員から学生たちへの伝達もスムーズだった。このような環境での練習を体験した学生たちこそ、海外でのフィールドワークに参加する実質的な資格が与えられてしかるべきだとつくづく考えていたが、そこまでの移行には教学上の課題があったりして、未だに実現までには至ってない。

2001年第1回日本フィールドワークからの反省点を踏まえ、さっそく調査地域や調査方法の全般を根本から改めることにした。要するに、以前の調査方法が難なく適用されそうな調査地域や環境が変わっている以上、授業としての日本フィールドワークをそのまま続けることに疑問を感じたからである。その段階で下した結論は、口述史に答えがあるかもしれないということだった。

地域や調査方法にこだわらず、とにかく面識のある人との話し合いや世間話を交えた交流を通して、彼か彼女のライフヒストリーを調べることにした。このような調査において肝心なことは、話者の語りをちゃんと録音することであって、従って充実した録音とともに、あとの文字起こしさえしっかりできれば、ある程度のライフヒストリーの再現は可能ではないかと思ったのである。

ライフヒストリーの有効性は人類学や社会学、または歴史学の一部からも評価されていたし、記憶を辿るという観点では心理学からもその有効性が指摘されていたので、思った以上の知的刺激になる作業だと思った。

赤の他人へのインタビューの申し入れはなるべく止揚する替わりに、以前から知っているか、または回りの誰かに紹介してもらおうようにしたので、佐久島で体験したような玄関口での気まずい体験はしなくてもよかった。そして、ライフヒストリーは話者の総体的な自分史やある特定の歴史的イベント、または事故に巻き込まれた時の自分の奮闘ぶりのように、全人生や部分史のように分けてもらった。ところが、このような分け方のいずれも、日本社会という舞台を忘れることは決してないようにと指導したつもりだった。

その結果①片茂永編『口述史調査報告書(1)』(愛知大学国際コミュニケーション学会, 2003年3月)と②片茂永編『口述史調査報告書(2)』(愛知大学国際コミュニケーション学会, 2004年2月)の二つをまとめることになったのは、当時のゼミ生たちの熱情とともに愛知大学国際コミュニケーション学会の物心両面からの支援のお蔭だった。なかでも特に記憶に新しいのは、終戦直後の生活について複数の話者から語ってもらったことであ

る。若い大学生たちだけでなく、私にとってもとても勉強になる内容が多かった。

ところが、演習ゼミでの日本口述史調査をさらに2年も続けたものの、『口述史調査報告書』にまとめる編集作業は第2輯で止ってしまった。したがって、それ以降の調査レポートについては単位評価にしかで、公開はされてない。公開はされなくても、ライフヒストリー調査に対する学生たちの関心や熱意が落ちたりはしなかったのも、佐久島の調査とは異なり、授業としての日本フィールドワークは私にとっても学生たちにとってもとても有意義な体験だった。

しかし、2005年の第5回日本フィールドワークを最後に、演習ゼミでの組織的な調査活動は続いていない。理由としては、学生側や大学側に何かの問題があったからではなく、もっぱら指導に当たっていた私の問題であって、即ち、国際フィールドワークと日本フィールドワークの二つを同時に指導することへの負担が大きな原因だった。ただそれが理由で、演習ゼミでの日本フィールドワークは、希望する学生への指導はそれ以降も続けたが、ゼミ生全員に対する指導は行なわなくなったのである。ところが、いま振り返ってみても、日本フィールドワークを組織的に行なっていたときの学生たちへの指導内容のほう、韓国での国際フィールドワークよりはるかに細かいで多岐に渡っていたことは否めない事実である。

つまり、海外での国際フィールドワークを学部の目玉にするということは、他ならぬ日本フィールドワークを通してまずフィールドワークのイロハをしっかり身につけることを意味すると、つくづく思ったのである。他にも様々な方面からフィールド型教育への関心が高まっている現状を鑑みれば、まずは日本でのフィールドワークを通して何を教育し、何を学ぶべきかを真剣に考えなければならないと思っている。

4. 展望と課題

以上は、韓国や日本でのフィールドワークに限った点検記録である。ところで、そこから浮上した反省点さえクリアすればこの先順調かといえば必ずしもそうではない。つまり、韓国や日本でのフィールドワークからも確認できたように、調査環境は年々姿を変えているし、民俗学の古典的な概念や調査方法についていろいろと考えさせられたのもまさにその事実と深く結びついている。さらに、授業科目としてのフィールドワークはこの先いったい何を指そうとしているかを考えるためでも、今までの変化とともにこれからのさらなる変化を読むのはとても重要である。

しかし、調査環境の変化といっても、実は調査にまつわる外部的変化だけに視線が行くかもしれないが、もう一つ注意を要するのがある。それは調査者自らの内面的変化である。即ち、世の中に溢れる情報の氾濫は、調査者をして教養レベルの基礎知識は習得済み

にしてくれたのではないかということである。教養レベルの基礎知識とは何かについていえば、学生と既成世代の教員とのあいだには質的なギャップは避けられないが、とにかくこの頃の学生世代からすれば、この世を生き抜く上で必要とする幅広い基礎知識は持っているとは私は思っている。とにかくその結果、学生たちのあいだでは、すでに多者間比較というグローバルな視点が暗黙の内に芽生えているのではないだろうか。

この現象は、10年前かそれ以前の学習者からすれば、かなりの進歩として映るかもしれないが、今の学生たちにとってみれば、あまりそのような自覚すらないまま進んだ自然発生的な変化かもしれない。生まれながらのグローバルなメディア環境で育っただけのことであって、問題はむしろ学生たちが直面しているグローバルな情報環境に適したフィールドワークとしての教育改革があったのかどうかではないだろうか。

要するに、あのような注意の喚起や問題提起がなければ、ただひたすら慣習化された手法や観点からの地域中心型か中途半端なフィールドワークに終始したかもしれない。しかし、学生たちがすでに持っているはずの異文化へのグローバルな好奇心に刺激を与えつつ、異文化同士の繋がりや脈絡について一定の説明が与えられれば、多文化比較への外延拡張はさりげなく行われると思う。即ち、既述の社会変化とともに、学生たちの内面からの変化からすれば、すでにグローバルなフィールドワークは求められていたかもしれない。

専門領域としての各国フィールドワークの有効性はこれからも変わらないだろうとは思うものの、学部生に対する異文化理解への補助手段としての国際フィールドワークである限りでは、グローバルな問題に連携させたほうがこれからは効果的だろう。例えば、世界遺産問題はその一つで、一国だけの世界遺産よりは東アジアや東南アジア、または地中海文化圏の世界遺産をグローバルな観点から俯瞰したほうが教育的にも効果的だろう。今頃の学生たちの関心は常に多国間のあいだで揺れ動いていて、ある一国のフィールドワークに集中してもなかなか彼らの興味には十分答えられない。国と国のあいだの間隔こそ、これからのグローバルなフィールドワークでは注目しなければならない。

その際、日中韓のように海を挟んで離れている地域よりは、ヨーロッパや東南アジアのように陸続きで繋がっている地域のほうが学部授業では適していると言わざるをえない。各国の関連情報への接近性も良好で、交通便もそれほど不便ではない。多国籍で無国籍風の食文化も世界中に広がっており、学生たちが数か国を移動する上で、障害になるようなものは年々減りつつある。このように、グローバルなフィールドワークを想定した際の諸条件は相当整っているといても過言ではないだろう。

各国フィールドワークやその他の手段を通して得られた情報は大学図書館にも豊富にある。従って、このようなアーカイブの再活用によっては、各国フィールドワークはそろそろ拘らなくてもいいような段階に辿りついているのではないか、そして国際フィールド

ワークという言葉の本意に立ち戻るべき段階ではないかと思っている。

参考文献

- 国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書(1)』2000年12月。
国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書(2)』2001年12月。
国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書(3)』2003年12月。
国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書(4)』2005年1月。
国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書(5)』2009年2月。
国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書(6)』2010年2月。
国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書(7)』2012年3月。
国際コミュニケーション学部『韓国フィールドワーク報告書(8)』2013年3月。
片茂永編『口述史調査報告書(1)』愛知大学国際コミュニケーション学会, 2003年3月。
片茂永編『口述史調査報告書(2)』愛知大学国際コミュニケーション学会, 2004年2月。